

王女 シルビア

工藤夕貴

illustration
宇野亜喜良



王女シルビア●工藤夕貴

illustration 宇野亜喜良

王女シルビア

一九九一年二月一〇日 初版第一刷発行

著者 工藤 夕貴

イラストレーション 宇野亜喜良

発行者 相賀 徹夫

発行所 株式会社 小学館

〒101-01 東京都千代田区一ツ橋2-3-1

電話 編集 03-3230-5442

業務 03-3230-5333

販売 03-3230-5739

印刷所 共同印刷株式会社

©Yuki Kudoh, ©Akira Uno 1991

Printed in Japan

ISBN4-09-363361-4

※万一、落丁乱丁などの不良品がありましたら、業務部までお送りください。送料小社負担にておとりかえます。

王女シルビア●もくじ



おとぎの国へようこそ

4

第一章 運命のおとずれ

7

第二章 三人の王女と二人の王子

37

第三章 月夜の妖精ようせい

63

第四章 シルビアの愛

103

第五章 父のぬくもり

139

第六章 呪のろいよふたたび 159

第七章 婚約者こんやくしゃの名前 181

第八章 シルビアと結婚けっこん 195

第九章 魔法まほうの石 219

●あとかき 252

装丁・イラストレーション 宇野亜喜良

おとぎの国へようこそ

私は小さい頃から、楽しい夢のあるお話が大好きでした。

学校でいやなことがあったり、家で一人ぼっちでさびしい時、私を支えてくれたのは、心の中でふつくと芽生えていたかすかな希望です。

「私もこんなお話を書きたい。こんなお姫様になりたいな。」

授業中に熱を入れてお話を書きながら、涙したりしていた私は、いつも通知表にこう書かれていました。

「注意力散漫。もっと授業に集中するように。」

「孤立している様子がうかがえます。」

いま思えば、確かに変わった女の子だったのかもしれませんが。

職員室の前で、取りあげられたお話 wait したのは、日課のようなものでした。

六年生になって、担任の先生で、そんな私を応援してくれる人が現れました。

私の書いたお話を読んでくれて、ほめてくれたり、時には直してくれたりしてくれるのです。その先生に会って、私の夢はどんどんふくらみました。

「いつか素敵すてきなお話を書いて、本を出したい。いつか作家になるんだ。」

結局、中一の時にスカウトされた私は、女優になりました。

でも、夢ゆめを忘れたことはかたときもありません。

このお話は私の夢であり、魔法使いや妖精がいなくなってから、世の中はつまらなくなっただけだ。という私の正直な気持ちの表れです。

ついに、私の夢がこの一冊の本に結集したのです。

どんな時も私は、現実では証明しょうめいのできない、子どもしか行くことのできないおとぎの国があることを信じています。妖精や魔法使いは、きっとあなたの胸むねの中にいるのです。そして、あなたに呼びだしてもらった日を、待ちつづけているのです。

だって世の中には不思議なことがたくさんあるのですから、妖精も魔法使いもいないなんて、否定ひていはできないでしょう。私はできるならば死ぬまで、生きることへのあこがれを追いつづけるつもりです。

きっと、おとぎの国の魔女や魔法使いや妖精たちは、いつまでも色あせることなく永久きゆうに私を支えつづけてくれるでしょう。

そして、おとぎの国の友人たちは、この本を読んでくれるあなたのことも、見守りつづけてくれることでしょう。

この本を、私の愛する母、弟、父、私の未来の子どもたち、
そして、私を愛してくれる、すべての人へ贈ります。



Enameled.

Enameled.

Enameled.

Enameled.

Enameled.

Enameled.

Enameled, Bible B...

Enameled,
Bible Back.

Enameled,
Raised Bible B...

of Stone, Diam. in
or Battle Axes.
Bible Back.

Enameled,
Raised Bible Back.

Garnet Eyes.

Enameled.
Skull and Bone, Back.

Enameled.
K. of P. & O. F. C.

運命のおとずれ

★第一章

あるそれはそれは美しい国に、三人のお妃様を持つ、とてもとても幸せな王様が住んでいました。

その国には、たくさんのくだものが、一年中その実をたわわに実らせ、野バラや白ツメ草やライラック、黄花の九輪草、七色のスミレ、それはそれは美しい花ばなが、世界一大きい宝石箱の中の、ダイヤモンドやサファイアやルビーやエメラルドのように、国中をかざりたてていました。

遠い群青の海から、すきとおる西風が吹くと、オレンジや、ピーチや、さくらんぼのいいにおいと、花の香水がかすかにまじりあつて、たとえようのない甘い香りが、人びとの髪をさわり、鼻先をかすめ、ワルツを踊りだすのです。

ああ……、なんて素敵に国でしょう。

王様は三人のお妃、ローゼ、ベラ、エルザをととても大切にしていましたし、何よりも愛していました。

ローゼ王妃は、陽の光にとけてしまいそうな金色の髪、雪のように白い、すきとおるきめこまかな真珠の肌、南の海のマリンブルーよりも、もつともつときれいな水色の瞳を持っています。

ベラ王妃は、黒曜石のようにつややかな黒髪、そして黒い魔力のある瞳、彫刻のように彫

りの深い不思議な顔立ちの女性でした。

そしてエルザ王妃は、燃えるような赤い髪にやわらかいウェーブ、見いつたらはなれられないほど魅力的な、緑のエメラルドの瞳。背の高い、しなやかでのびやかな美しい体を持つていました。

あるいつもと何も変わることはない晴れた美しい日、この城の中では大変なさわぎが起こつていました。

それというのもこの三人のお妃が同時に子どもをさずかり、それも同時に今、生まれようとしているからなのです。

三人のお妃には三人の名医がつけられ、それぞれに十人ずつ侍女がつかまりました。

そして今、元気の良い赤ちゃんの産声が、広い城内にひとときわ高くひびきわたりました。

王様は冷汗をたらたら流しながら、涙ぐんでローゼ王妃の部屋へ入っていくと、産婆は白いやわらかな絹の布でつつんだ赤子を、王様にお見せしていました。

「王様、ご覧くださいませ。お妃様と同じ金色の髪、真珠の肌、そして王様のやわらかな巻き毛、この世の者とは思えないほど美しい。——ああ、このブルーの瞳、まるで天使のようでございます。」

王様は、すぐさまこれわねそんな人形を抱くように、そつと泣いている赤子を抱きました。すると赤子は、ぴたつと泣くのをやめ、本当に本当に天使のように、いいえ、天使よりもっと美しいかもしれない笑顔を浮かべたのです。

王様は、心をすべて洗われたように純粋な気持ちになり、そのほおにそつとキスをして王妃にいいました。

「本当によくがんばってくれた。なんという美しい子だろう。きつと大きくなったら誰よりもすばらしい王子が、この子を愛し、幸せにしてくれるにちがいない。本当に美しい。」

そういうと、一つぶ涙を落としました。

お妃は、心から幸せそうに笑うと、王様にキスを求め、王様は愛をこめてキスをしました。お妃も、美しく上気したピンクのほおに、涙を流し、笑顔を浮かべました。

そのころ、ペラ王妃の部屋でも産声があがりました。

王様は心をここに残しながら、となりのペラ王妃の部屋にも行かねばなりませんでした。その部屋では、黒髪くろかみのペラ王妃が、王様のおとずれを今か今かと待っていました。

王様は息せききってドアを開けました。

気の強いペラ王妃は、いきなり、



「何をしていたの？　あなたのかわいい赤ん坊が、この世に生をうけたのに遅すぎるわ。」と、わめきちらしました。

王様はその態度がはらだたく、ろくに赤ん坊の顔を見ずに出ていってしまいました。

お妃はますますはらをたてて、いったいどっちのお妃のところへ行っていたのだろうと考えました。

王様は、ローゼ王妃のやさしい純粋な赤子をもう一度見たくなって、もどりかけていましたが、三人目の赤子の産声が聞こえたため、また急いで、エルザ王妃の部屋へ走りしました。

エルザ王妃は笑顔を満面にたたえて、王が入ってくるなりしゃべりはじめました。

このお妃は、とてもおしゃべりの好きな自慢家なのです。

「まあ、あなた見てやってくださいいな、この子の美しいこと。あなたの栗色の髪をうけついでいますわ。でももつと美しい色よ。私の赤い炎のような色目もかかっていますわ。そして肌の色、白すぎて病弱そうな子どもはきらいですわ。この子の肌の色は、健康的な褐色がかかっていますわ。大きくなったら、まるで野をかけるチーターのように、しなやかで美しい肢体になるでしょう。そして、私のこの宝石のように輝く深い緑の瞳……。話は変わりますけど私、あなたの鼻がとても好きですの。小さくて上向きの高く美しい鼻、この子はあなたの鼻をうけついで

わ。ああ、このくちびる、まるで彫り物のようにくつきりしている。きつといつの日にか、人びとに幸せをあたえることのできる、素敵すてきなおしやべりができますわ。それに……」

王様は、このままずっと聞いているのはたまらないと、

「さあ、早くお前の赤子を抱だかせておくれ。」

と、いいました。

お妃は産婆きさきにいいつけると、王様にその子を手渡させました。

そのとたんに、赤ん坊あかぼは顔をくしゃくしゃにして泣きだしました。

顔も何もわかりません。

それに今度は三度目でしたから、初めて自分の子どもを見た時よりは、少しばかり心も落ちついていました。

一日中そわそわしていた王様にとって、赤ん坊のかんだかい泣き声はたまりません。

そして、お妃のおしやべりも、朝からそわそわしていた王様にとっては、少しばかりうるさいのです。

お妃の、まくしたてるようなしやべり方は、王様の心をいらだたせるばかり。

冷静な時の王様には、このお妃のおしやべりも、退屈たいくつしないための絶対条件ぜったいじょうけんでした。

彼はいつも、国家の予算問題や、国民のうったえやいろいろな仕事で忙いそがしく働いていますし、

たくさんの方や帝王学、多くの国の言葉を勉強していました。

そんな時つかれると、気分転換にこのお妃はとも王様を楽しませてくれるのです。もちろん王様はこのお妃を愛していました。

ただこの時は、さすがに正気ではいられません。

王様は、出産という男にはわからぬ心配が、なんと三つも重なったのですから、本当にいつも同じではいられなかったのです。

思わず、

「なんとか、この子をだまらせておくれ。」

と、いつてしまいました。

エルザ王妃は、すぐ感情的になってしまう方でしたので、すぐさま泣きだし、

「ひどいわ、あなた。私を愛しておいででないのね。この世に二人といた、この美しい私とあなたの子どもをだまらせるですって？ 私は今すぐこの窓からとびおりて死んでやるわ。私の魂は天高くのぼって、この子を守りぬくことでしよう。ほかの子どもたちには決して負けることなく、この子が、私の大切なプリティーエンジェルが、幸せな女王になれるように……。」

王様は、はつと我に返ると、

「ああ、すまなかった。朝からずっとお前のことばかり心にとめていたものだから、ついつい